

論文審査の結果の要旨

論文提出者 酒井千絵

論文題目 境界を越える／境界に生きる：1990年代日本から香港・中国への自発的移住を事例として

本論文は、1990年代以降増加した、日本から香港・中国への移住・滞在という経験を事例とし、①当事者が語るライフストーリー、②政府統計から読み取れる移住の実態、③政府や公共機関による移住史、④マスメディアに流通する表象などを比較対照しながら、移住の経験に意味を与えた「社会的な語り」と「移住者個人の経験」との関連を実証的に分析した労作である。資本や人や文化・情報が国境を越えて移動することが一般化した現代社会では、複数の言語能力やジェンダーを利用して移住を試みる人々が存在するが、彼らはその移住の経験において、政治的、経済的、文化的に、国の境界に関与し、また自らその境界を再編する過程に入っていく。本論文は、このような「境界の再編」の実態を、ジェンダーやエスニシティにかんする諸理論を援用しながら分析することを通じて、現代の移住経験がもつ独自の意味を明らかにし、現代において重要な 이슈となっている「国への帰属」という問題にも新たな認識の視角を提示したものといえよう。

本論文の第1章～第3章では、研究対象と目標の設定、方法論的な検討による分析枠組の設定、調査の設計に関する検討が行われている。先ず、本論文は、研究対象として日本から香港・中国への自発的移住を取り上げ、この国際移動の様式が、グローバリゼーションのなかにある政治・経済・文化のさまざまな側面で国の境界に拘束されながら、国の境界を利用する両義的な経験となっていることに着目し、そこで人々が国の境界と具体的にに関わりながらどのような選択をし、どのような営みを行っているのかを明らかにすることを研究目標として設定する。

次いで、本論文は、①国際移動の経験を二国間の関係性に対する個人的な行為として分析

する従来のプッシュ・プル理論ではなく、複数の地域が政治的、経済的、文化的に関わり合う「国際移住システム」という視点を援用する、②移住者がエスニシティを拘束条件というよりも資源として利用している側面を重視する、③男性労働者をモデルとしてきた従来の研究に対してジェンダーの視点から問い直しをする、④日本社会の文化変容とジェンダー関係のなかに国際移動の経験を位置づけ直す、といった分析枠組を立てる。

そして調査の設計としては、現代日本から香港・中国への移住という研究対象の特異性を考慮する。香港・中国への移住は、ジェンダーやその動機によって移住経験のありようが多様であり、他の移住候補となる地域と比較しながら選択・決断されたものである。そこにはさまざまな「社会的な語り」の媒介がある。それゆえ、本論文は、移住者自身のライフストーリーを聴き取り、それらを政府統計やマスメディアによる表象などの社会的なストーリーとの相互作用において分析するように調査を設計する。

第4章から第7章はこうして調査された資料にもとづき、日本から香港・中国への移住の実態を分析したものである。第4章では、従来、日本からの移住は政策的、永住的、集団的な移住の形態に力点をおいて考えられてきたが、1980年代以降日本人のアジア地域への出国、滞在、移住が大きく増加していること、そしてそれらが個人的で一時滞在的な形態を帯びていることが示され、その意味を探る必要性が提示される。第5章では、こうした移住の経験に影響を与えたマスメディアの作用を捉えるために、テレビや雑誌などの資料から国際移動のイメージとその変遷が分析された。

第6～7章では、著者が香港・中国で蒐集した移住日本人のライフストーリーが分析される。第6章では、自発的移住者のほとんどが女性であることから、ジェンダー関係に焦点を置いて移住先の選択、仕事や生活の変化、企業社会への適応の実態が分析された。第7章では、人々の長期滞在化や香港・中国及び日本の変化を踏まえて、移住の形態の変化、つまり香港や中国への移住を最終目標としない新たな選択が行われていることが示された。

第8章では、第4～7章での分析にもとづき、日本から香港・中国への移住における経験の多様性とその両義的な構造が分析される。第一に注目されるのは、自発的移住者は日本企業の派遣駐在員との待遇の格差や異なる動機において移住の多様性を示していることである。第二に、これらの移住者はその動機とは別に日本特殊論や文化的ナショナリズムを資源として利用していることである。女性を中心とする自発的移住者も、日本社会のジェンダー関係に距離を取りながら、他方では日系企業社会がもっているジェンダー関係を利用しているのである。こうした自発的移住者は、国やジェンダーの境界を一方で非本質的なものとして相対化しつつ、他方では本質的なものとして構築するという両義的な経験を通じて、それらの境界を再編していく過程に身を晒している。

以上が本論文の結構であるが、その独自の学術的価値として次の諸点を挙げる事ができる。第一に、本論文の研究対象にかかわることだが、日本では、高度経済成長期以前の政策的・永住志向的な移住を除くと、近年の増加の割に日本からの移住に対する関心は少なく、国際移動研究の文脈でも十分な研究が行われてきたとは言いがたかった。このような状況のなかで、本論文は、①日本からの自発的移住、②香港・中国への移住という、新しい事例を取り上げ、③それを国際移動システムという枠組みのもとで分析するという点で独自の業績となっている。

第二に、本論文はこれまでの日本からの移住史や、国際移動にかんする先行研究を踏まえて、国際移動システムという視点を採用するとともに、1996年から2002年にかけて、著者がインタビュアーとなり、当事者による移住経験の語りを一次資料として丹念に蒐集し、分析したこと、またその資料価値という点においても貴重な労作となっている。また、当事者の語りを扱うに際しても、メディアやエージェントに対する当事者の距離の取り方に焦点を当てることにより、それらの語りの独自の位置を浮かび上がらせることに成功しているといえよう。

第三に、本論文は、今日のグローバリゼーションの趨勢のなかで、ナショナリズムとジェンダーの変容にかんする議論に貢献した点も評価されるべきである。本論文は、移住者が日本という国や文化の境界を本質的なものとして構築しながら、他方でその境界をまたぐ仲介者として機能することを通じて、国や文化の境界を利用し、相対化する経験を浮かび上がらせている。またそれが、移住者が日本文化にあるジェンダー関係を利用可能な資源として戦略的に組み込むことを通して可能となっているという主張も説得的である。

第四に、従来、日本から欧米への移住経験では、ジェンダー関係から自由になるという理想主義的な側面が強調されながら、実際にはそうでなかったという面があったのだが、この矛盾した構造自体はあまり語られてこなかった。それとの対比でいえば、本論文は、香港・中国への自発的移住において、当事者がジェンダー・フリーを志向しながらも、移住先でジェンダー関係を自ら再生産する振れたメカニズムが生成することを実証的に明らかにした点で、独自の価値をもっているといえよう。

他方、本論文には次のような問題点があることも指摘されねばならない。

第一に、本論文が取り上げた自発的移住者には、移住に際して自分の独自性を主張しながら、じつはその独自性を崩すような生き方を強いられるという屈折した構造があり、その屈折自体が境界の見え方や境界という資源の拘束／利用の仕方にどう影響を与えているのかが必ずしも明らかでないところもあり、この点は今後の課題となるだろう。

第二に、本論文はジェンダーとそれに絡む階層性ないし周縁的な地位を背景にして発生する問題に分析の焦点を当てており、その意味では、変数として階層性をもっと組み込んだ分

析が期待されるところだが、被調査者の多くがある程度同質的な人々のグループから成っているという点で一定の制約があるといえよう。

第三に、本論文では、個人のライフストーリーの語りがメディアの語りなどの社会的なストーリーとの相互作用において分析されるが、メディアの語りは商業主義やモードの論理に影響されて構築されている面があり、それが十分に見えにくいところもある。

しかしながら、これらの問題点は本論文の結構や全体の業績からみればマイナーなものにとどまっており、本論文の叙述の一貫性や学術的な価値の高さを損なうものではない。したがって、本審査委員会は、本論文を、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。